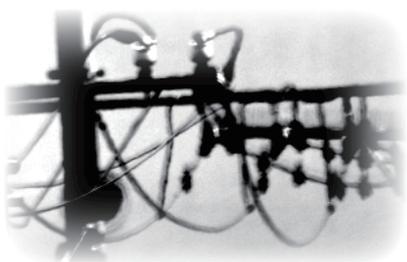


じふにさんろじー 二〇〇九年版



うろこアンソロジー 二〇〇九年版 目次

暗夜	連作「草男幻双紙」	足立和夫	3
左右の距離	有働薫	6	
双子は気まぐれ	南原充士	10	
テノスのちから	高田昭子	15	
あれら光るもの	三井喬子	17	
樹の宿題	石川為丸	21	
ふくやま慕情・月ものがたり	一瀉千里	23	
五朗ちゃん	若井	29	
2009年、冬	富澤守治	31	
孤独なこども	おかだすみれこ	34	
同じ空間で	水島英己	37	

暗夜

連作「草男幻双紙」

足立和夫

草の原の夜に

みつつの紅い月明かりがあつた

風の塊が烈しくうごいてる

ひかりがはためいて

みじかい時間が引き延ばされていく

わたしは崖の下に降りた

底を探しているのだが届かない

まだ深いのだろうか

境涯の果ては見えないのだろうか

そのうち星がみえてきた

もうひとつの宇宙をこえなければ

わたしは生きられない

草男の影が目のまえに現われた

かれは腕をのぼし

黙ってひとつの墓標を示した

わたしの名がみえる

草むらのなかに水たまりがあったので

からだを横たえた

すると

からだは草になり

蛇になった

死はいつもあたらしい

水底をくぐり

わたしは見知らぬ草原に座っている

星はなく

荒れたひかりがあった

猥りがわしい匂いがただよっている

ひとがいるのだろうか

匂いはわたしのものだろうか

ひとはすでにいなかった

消えたのは大昔だ

時間が終焉にむけて

流れているだけだった

草男のくぐもった声が

耳に籠もった

わたしのからだは時間なのだ

すべて在るものは

時間の飛沫があらわれたものである

草の声が途絶して

森羅万象はすべて

いつまでも

奇っ怪な姿のままだった

左右の距離

有働薫

一九二五年度ノーベル文学賞を受けたイギリスの劇作家バーナード・ショーは彼の代表作『聖女ジャンヌ・ダーク』中のト書で、ジャンヌの容姿を次のように描写している。

「十七、八歳の健康な田舎娘。上等の赤い服を着てゐる。非凡な顔。二つの眼はたいそう離れてゐて、想像力の強い人間によく見受けられるやうに突出してゐる。鼻筋の通った形のよい鼻、大きな鼻孔、短い上唇、意志の強さうな、けれどもふつくらとした口許、やはり負けぬ気らしい、均齊のとれた顎。」

ショーはこの描写を、単に自分の想像のみで行ったのではなく、この戯曲の冒頭に付された序論のなかで、次のような資料を紹介している。

「当時オルレアンの彫刻家が、冑を被った娘の彫像を作つてゐるが、明らかに想像による作品ではなく肖像であるといふ点で当時の美術として特異なものであり、しかもその顔たるや極めて非凡であつて、このやうな顔付の娘が嘗て二人以上存在したとは到底思へぬ程である。」

そしてショーは自分の意見を示す。

「無意識裡にジャンヌが彫刻家のモデルになつてゐた、さう推測してよいと思ふ。勿論、その証拠は無い。けれども、異様な程離れたその二つの眼は、強烈な説得力をもつて問ひかけて来るやうに思はれる、「これがジャンヌでないのなら、ジャンヌはどんな顔の娘だったのか」と。」

小野小町も紫式部も清少納言も、さらに遡つて光明皇后も額田王も、はては卑弥呼、さらに白拍子の静、常盤御前でさえ、どんな容貌の女性だったのかを知りたいと強く思ったことはない。

だがジャンヌ・ダルクについては、シヨールの場合は自作の戯曲の主役として容姿の指定は避けて通れぬ条件であったわけである。

ジャンヌ・ダルクほどさまざまな彫像、絵画に表現された女性はいないかもしれない。はだして糸巻きを抱いた少女であったり、吏員系といわれるような、ブルジョワ風のビロードの衣装の町娘だったり。

もしジャンヌの受けた異端裁判の記録が残されていなかったら、ジャンヌ・ダルクの实在さえ、疑問視されただろう。

異端とは突出すること。時代の秩序を超えて生きようとする。そしてシヨールの序論によれば「社会は不寛容、すなわち狭量を根底にして成り立っている。」

シヨールの戯曲『聖女ジャンヌ・ダーク』をもって、今までのところジャンヌ・ダルクに

ついでの実像と評価は決し得るようだ。

注 かつこ内の文章は新潮社から昭和三十八年出版の福田恆存・松原正訳『聖女ジャンヌ・ダーク』による。

双子は気まぐれ

南原充士

夏らしいヘアースタイル

う・ふ うなじがかわいい

イアリングがゆれて

女の子 二人だけで歩いている

おいしいフランス料理のお店

ブレスレットの白とミニスカートの白

ワインとフォアグラ

おしゃべりな唇に吸い込まれて

笑い声がひびき

いたずらっぽいしぐさで

男の子たちを困らしている

クールなサマー いえ ホットなブザム
キュートなおしりで

きみたちは双子のフェアリー

う・ふ スキップしながら

時のトンネルを通っていく

ふり向いて

いつまでも見ていたいけど

それはだめ

禁じられたストップモーション

巻き戻したテープじゃないんだ

ターン そして ターン

夏が終っても

う・ふ 気まぐれは変わらない

めぐり逢ひて — 私の小倉百首から

倉田良成

はやくよりわらはともだちに侍りける人の、としごろへてゆきあひたる、

ほのかにて、七月十日のころ、月にきほひてかへり侍りければ。

めぐり逢ひて見しやそれとも分ぬまに雲がくれにし夜半の月影

紫式部

あれからもう何年たったのだろうか。たけくらべのころは遠慮というものを知らなかった。それから髪をすこし長く伸ばし始めたときおたがいはにかで、合せ鏡のように相手のうちにじぶんの喜びや悲しみを見た。いじわるも仕掛けた。仕掛けたのはいつもこつちで、けれど仕掛けられたむこうは笑ってとりあわなかった。それがもつとくやしくて、道の真ん中につつ立ってなみだを流しているとなみだを拭いてくれ

た。甘いものをたべておいしいおいしくないと大騒ぎをし、おひるをラーメンにするかパスタにするかで大もめにもめた。学校を出てから働きだして、それぞれがちがう男を選んで結婚してから、会うことが間遠になった。おたがい忙しかったし、ちがう街にいた。はじめは長い電話もしたけれど、仕事で夜遅く帰ることが多くなつてから、それも途絶えがちで、やがて絶えた。あの声を忘れることはなかったけれど。それから何年たったのだろうか。彼女がこの街に用事があつて来ると知らせてきたのは。化粧もそこそこに、待ち合せの店に行くくと、そこにあのころの彼女がいた。目尻のしわが、変わらない彼女の顔をすこし思い出の影がかかったように見せている。こつちの顔も、相手には似たようなものに映っていることだろう。話すことは山ほどあった。聞きたいことも十指に余るほど。友達のこと、子どものこと、恩師のこと、旦那のこと。けれど話が佳境に入るか入らないかあたりで、もう行かなくてはならないと言う。まだ電車はあるのと言うと、

首をふり、家にはなくこの街にある大学病院の消灯に間に
合わせるのだとうちあけた。入院なら毎日おみまいに行くよ
と言ったら、来ないでほしいからこうして会いに来た。お願
い、ここに来るなんてことかんがえないで。もうあたし、誰
にも会うことのないところに行くの。ときさやいたあの夜の
声を、わたしはけっして忘れない。

テノスのちから

高田昭子

多くのおとこたちが
孤独なテノスを追いかける
辿りついた者は一人だけ
海のなかの受粉

テノスはだんだん
魚のようになる イルカのようになる
海はだんだん狭くなる
ちいさな足が海を蹴って 大気の浜にあがる

獣の子のように

裸のまままで叫び声をあげて

神々を集め 死神さえも呼びよせる

息をする 汗をかいている

足裏から脳髓まで連結する骨格を積み上げて

いのちの重みに眩暈しながら二本足で立った、テノスよ。

あれら光るもの

三井喬子

視覚世界は多層的だ

表面を覆う透明な世界が瞬時の衝撃と共に破れたので
否 気づいた時にはそうなっていたので

蒼穹には細断されたセロファン紙の小片が漂っている。

流され

押し戻され

渦巻く透明なものたち。

八月の空は永遠なるものに重なっている。

視覚世界は多層的だ

その襞々の間に棲むものを

「魂」といふべきだろうか

離脱し昇天した懐かしい人たちの残片が

際限も無くセロファン紙の小片の向こうに重なっている。

セロファン紙が身をそらすと

目鼻立ちがかすかに色濃くなる…

雲一つ無い蒼穹は

窓枠に切り取られていて

わたしたちはそれを「空」と名付ける。

青い空

八月の空

の永遠。

(白熱する無邪気な太陽

残された者の永遠はひどく明るい。

過剰な時間を弄ぶ流れは 常に新しい。

視覚世界は多層的だ

魂の破片のようなセロファン紙が流れているので

渦巻いているので

蒼穹に手を合わせれば

変貌し変容してしまう顔たちである。

(二つめの太陽は落ちたが 三つめはまだ熱い

帰っておいで。

つかの間でも良いから帰っておいで。

空が重すぎるからとか

もうじき目が見えなくなるからとか

様々な理由をこじつけて会いたい人を呼び寄せると

呼び寄せられる 蒼穹に。

病床に太陽の斜脚が伸びるころは

とりわけて動揺するセロファン紙

その拡散し集合する青天の片々を 一枚一枚抓んでみる

ああ 空の秩序は混乱している。

剥がれた諦念がキラリと光り

視覚世界は多層的で

蒼穹には 数え切れない太陽が疾走している。

樹の宿題

石川為丸

六月の夜の大通り 島酒に酔い痴れて でたらめを叫んでいるわかものたち 通りすがりに声をかけては無視されている者 行き場もないのか コンビニの前に坐り、うなだれている者もいる。自分を支えるもの 自分が支えるべきものもないのだろう。この島にて。

路上を吹き抜ける初夏の烈風に くるしげに身をゆする裸樹 葉は落とされ、ちりぢりにはこぼれていったのだ。

樹の宿題を残したまま。この島はいつだって金網フェンスの向こうもこっちも まちがったものがまちがったやり方でつくられていたから ここで 私は何をしていたか

シュプレヒコールの波 突き上げる 青インキに染まった 軍手 鉄筆で 刻んだ 薄明の 言葉 青春のくらい冥い盟約 もがきよじれもぎれた組織の きしみきしる軋轢 そのくるしみがどんな形をとったかは知らない。

私はただ通り過ぎるものだったから 本当のことをぼかしたまま 呼びかける声に答え
なかつた

はぐれた町外れの つまづきやすい石畳 息を切らして下っていけば 廃屋の崩れかけ
ている石垣に 烈しく光が降り注いでいた 浜辺の珊瑚は散らばった骨のようだ。

人のいのちのかなしみは この島のおちこちにただよい、私はここで何をしつつあるか
仏桑華の赤は あくまでも鮮やかに 島での悲しみはまだ、終わってはいけななくても
どうかのように 降りそそぐひかりのなかに、顕つひとが見えていたのだ 樹の宿題を
残したままの島惑い 私はそのとき、どこにも属するところのない 異風な声の、なに
ものかによばれているようだったから

ふくやま慕情・月ものがたり

一瀉千里

I

街へと向かう夕暮れ

行かなくちや 必須の用事で

信号が変わると すばやく右折して

一気に坂をかけ上り 住宅街を抜ける

いつもの 坂道

車や自転車や 犬を連れた人が通る夕暮れ

その坂は やっぱり空へと続いている

並ぶ玄関の 扉の内側では

ピンク色のセーターを着た若いミセスが

エプロンをして 夕餉の支度をしているのだろう

空を突っ切る直前で 左折

螺旋状の坂を 今度は勢いよく下る

夕闇は すっかり迫って

テールランプの 赤い列が鮮やかに蛇行する山の裾

つきあたっての広幅のガードレールを境界線に

芦田川の中 丸く大きな月が泳いでいる

空には 本物の満月

満月がふたつ

神島橋は 家路に向かう車で大渋滞

私は 反対方向の街へと 右折する

行かなくちゃ 急いで

今日中に封書を出しに

私の想いをつめこんだ詩が 封書の中で発酵しないうちに
東京へ届けるのよ 今日消印で

II

天満屋の八階から 遥か下を見おろすと

たくさんタクシーが 箱庭の中で

ミニチュアのおもちゃのように動いている

その昔 あそこらへんには

ふたつの歩道を結んだ長い歩道橋があつて

私の小さな物語の 青春があつた

時代とともに消え去つた歩道橋が

ゆらゆらと浮かび上がってくる私の中の夕闇

東京からの新幹線が 福山駅へと滑り込む

母は言ったっけ

落ち込んでいた私に

（ほら 新幹線が通ったから

きつと いいことがあるよ

ジnkスのように ささやいた遥かな日々

空には満月

福山城の まっすぐ その上あたり

III

サファに寄るのは たいてい帰り道で

瀬戸の町から見る満月は薄黄色

取り囲む山々は低い

そこでの空は 昼も夜も突き抜けるような無窮だった

こんなにも 空を見上げて

つかの間 満月を目の中に浮かべる

ときにはデジカメで 満月を捕えながら

どこまでも行っても ついて来る夜は

連れ帰ってほしいのだろうと

満月を抱えて自宅に持ち帰り 湯船の中で磨いてみる

空には星が やけに光って

みんなが寝てる間に こっそりと

誰にもみつかからないように 湯上りの満月を空に戻す

IV

薔薇の夕暮れには 薔薇公園に

岡山から車を飛ばして佳子がやってくる

（薔薇はね 午前五時が いちばん綺麗なのよ

東の空には いつの間にかセロファンのような薄い月

西の空には 吸い込まれるように 真っ赤な夕陽

月と太陽が共存する ミラクルな時間帯
（そのどちらも欲しがってはだめなの？
佳子と一緒に 仄やかな香りに包まれて
私は いつしか 天空になる
右手には月 左手には……。

五朗ちゃん

若井

前はちゃんと五朗さんと言ってたのが

最近はみんながゴロー、ゴローと呼び捨てにするようになったんだからよ

年上のものには、ちゃんと「さん」を付けなさいと説教したわけよ。

それなのに、帰り道

性懲りもなく、後から

「ゴロー、ゴロー」と若い女の声がするんだな。

なんだよ！と振り返ってみると、それが、

犬を連れてたの……

五朗ちゃん その2

五朗ちゃんは節約生活

友達の家遊びに行くと、

奥さんがお土産に

冷蔵庫の中から賞味期限切れの食物を持たしてくれる。

だからよ

最近はおなかの中がいつも「ゴロー　ゴロー」しているんだと。

2009年、冬

富澤守治

ひとびと

成し遂げられなかった、人生の大事を
多くいまでも孕む

陰を踏み、荒き嵐の坂道を歩き続ける

ひとびとよ

暗夜に彷徨うならば

月影が彼らの丸い背を照らしてはいるのだが
ひとびとは朝が来ても、それに気づかない

この暗黒に真^{まぢか}近い、灰色の時代

越えてきたのか、越えて行けるのか

この冬もまた寒い

聞こえるか、聞こえるか

流れ出している流行歌は

街頭演説のスピーカーから発せられたものだった

「いまだ足りない、いまだ足りない」

政治家たちは必死に叫ぶ

予算が足りないというよりも、希望が足りないのだ

ひとびとの希望、切実な生活の不足

つきまとう悲しみたち、喪失、うめき声

幾重にも本当のことは隠されている

この十年ほどのこと

何も経済などは回復していない

バブルの「戦後」は終わらず

産業を隠れ蓑にした

この悪しき、金融の慣習ばかりが

この惑星を席捲した

世界化、グローバルズム

犠牲者たちが壊れて行く、壊れて行くままに

罪もなく、生き晒される、あるいは自殺していく

おなじく、その子供たちも罪はあろうはずもなく

若者たち娘たちも罪はなく、そんなそんな

名もなき、ひとびと

孤独なこども

おかだすみれこ

あなたがわたしを探せるように

あなたにもう一度わたしを見つけて貰えるように

この場所から動くことができない

「紫 野うさぎ 夕景 森 すみれ 木の葉 そう、言葉……。」

5年半というあなたと過ごした時間のなかで

いくつものキィ・ワードが生まれ

それはまるでふたりのあいだに産まれた愛しいこどものようだった

はじめから意味が与えられ宿命のように未来のない

孤独なこどもだったから

わたしは壊してしまわないように大切に育んだ

こどもは少し成長して詩集になった

恥ずかしそうに街にでていった

未発達だけれど感受性だけはもっていて

傷つきやすいということ

誰よりも知っているのはわたしだった

いえ あなただった

キィ・ワードの鍵穴をつかって

あなたの力づよい囁きと交接をくりかえしながら

この安心感が半永久的につづくものだと

愚かにもわたしは思っていた

とつぜんにあなたが消えた

わたしはもう何日も泣いてばかりいる

こどもをみるとあなたを思い出すから

目を伏せて遠ざけている

こどもは成長をやめ

わたしは年老いていくだろう

暗号のようだと愛しく見つめていたのは自分だけだったのか
血が滲むほどに握り締めた掌のなかでコトバが凍りついていく

あなたが消えた謎解きだけがわたしに残された唯一のあそび
今夜も冷たい指に息をふきかけながら

真っ白いノートを見つめているが

どうしてもここから先に進めない

「紫 野うさぎ 夕景 森 すみれ 木の葉 そして・・・」

そうコトバはいまひっそりと凍っていくところだから

微笑が答えを連れて

このノートの上にもどってくることはもうないのかもしれない

同じ空間で

水島英己

アレクサンドリアの
玉ねぎくさい部屋。

句読点が皺や浮腫の代わりに背中の文字になる。

アレクサンドリアの

排水の悪い部屋から、あなたが出てくる。

愛人の背中に走る血をあなたは

地中海に開いた窓辺で飲みほしました。

破廉恥であった二十代を

ストイックにラコニックに記憶せよ、その背中の刺青のように、

きみたちに可能な痩せた倫理を

アレクサンドリアの

クレオパトラの美やエロスとひとしくしなさい。

神はいまだ見捨てたわけではない

作品百三十五弦楽四重奏曲第十六番へ長調の晩年の様式
皺が刻みこまれあまつさえ引き裂かれている

「いつも世界に対してかすかに傾いて、

身じろぎもせず立っている」人

「そうでなければならぬか？」

峻厳であって、同時に情にもろい人

美しい白い花にふさわしい二十二歳の友の別れの言葉

「ぼくらのあいだはもうおしまい」

喜びにつけ悲しみにつけ、あなたは同じ空間を歩き尽くした
神話の、歴史の、魂の町であった、その筋から筋を

ここに立たせておいてくれ、

朝焼けの二重の色、紫と青がまざりあっている 空

立ち去ってゆく夜の背中

やって来る朝の名前

深い沈黙

「そうでなければならない」

欠けているのを何一つ満たしてはならない

かすかに傾いて